

琉球大学学術リポジトリ

[書評] 屋嘉比収(YAKABI Osamu)著『〈近代沖縄〉の知識人：島袋全発の軌跡』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2016-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 照屋, 信治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33989

[書 評]

屋嘉比 収 (YAKABI Osamu) 著 『〈近代沖縄〉の知識人——島袋全発の軌跡——』

吉川弘文館(東京) 2010年2月 222頁

照 屋 信 治 (TERUYA Shinji)

1. 本書の概要

本書は近現代沖縄を生きた知識人島袋全発(1888–1953)の評伝であり、その思想分析を通して描かれた沖縄近現代思想史の書である。本書の帯やカバーに「沖縄思想史入門」とあり一般の読者も想定するが、現在の沖縄思想史の重要論点に対する著者の認識と態度が示され、沖縄思想史研究の現状を読み取りえるものである。本書の構成は次の通りである。

「沖縄学の群像——プロローグ」「知識人・全発の誕生 文明開化から植民地時代へ(幼少時代から第七高造士館時代まで 国家観と民族観の相克——太田朝敷、伊波普猷との認識の相違 京都帝国大学法科学学生時代)」「教育と南島研究の時代(帰京後の全発の活動 昭和戦前期の郷土研究への沈潜)」「戦時体制と沖縄方言論争(総動員体制期における言論 戦時体制下、戦場での全発)」「戦後を生きる全発(沖縄民政府時代 戦後の活動)」「沖縄近代史とは何か——エピローグ」「あとがき」「主要参考文献」「略年譜」

まず、「プロローグ」で、沖縄近代思想史上の全発の位置づけが行われる。沖縄の言論人・学者を「沖縄学の群像」として示し、その活躍した時期や場所により五つに分類し、伊波普猷らの後発世代であり、生涯のほとんどを沖縄で生きた全発を「沖縄学第二世代／沖縄在」とする。それは激動の近代沖縄の歴史を沖縄の住民として体験した知識人であり、沖縄戦を経て、その後の米軍占領を生きながら紡がれた思想を読み取りえる対象ということである。従来、深められなかった問題群への考察の進展が期待できる対象といえよう。

最初の章「知識人・全発の誕生 文明開化から植民地時代へ」では、1888年の出生から、幼少期、第七高造士館・京都帝国大学をへて1915年の帰京までが対象となる。その中心的な論点は、全発が提示した「琉球民族」認識の解明である。全発は、伊波普猷の影響をうけつつも伊波とは異なった民族意識を有しており、「民族性と経済との関係を論ず」(1914)という論文では、「琉球人は無論日本国民であるけれども、大和民族であるとするのには疑いがある」(本書63頁)「琉球人は大和民族と極めて親密な関係にある異民族であるとするのが妥当ではあるまいか」(64頁)としている。その認識は、「客観的方面」より日琉同祖論を唱え、それと同時に沖縄の「個性」を主張する伊波とは異なり、民族意識の「主観的方面」を重視するイタリアの国際私法学者マンチーニの説を沖縄の状況に引き寄せて導き出した認識であった。そのように沖縄を認識する全発の意識は、植民地に対する認識でも独自の視線を有することになる。「殖民史を読みて感あり」(1913)という論文では、「被統治者の視点」から植民地政策や同化主義が論じられ、被統治者の人類への貢献の在り方が示され、「被植民地側からの多他民族的な国家主義の視点」(59頁)が示されている。日本の台湾・朝鮮における植民地政策の批判をも含むそのような視点は、自らを被統治者と自認する全発の自意識によるものである。

二つ目の章「教育と南島研究の時代」では、1915年の帰郷から1930年代半ばまでが対象とな

る。沖縄毎日新聞、那覇区役所を経て教育界に入り、女子教育、郷土研究へ沈潜してゆく様子が描かれる。那覇区助役問題で教育界へと転身し、また先行世代の伊波普猷・東恩納寛惇らとの葛藤をへて、さらに研究へ傾斜する過程が跡付けられる。この時期、「琉球民族」意識は微妙な変容をきたす。「満鮮旅行による教訓」(1924)という論文は、旧満州で開催された全国高等女学校校長会議へ参加した際の視察記だが、そこでは朝鮮人・中国人に対する差別的認識を持つ日本人への反省が促され、彼・彼女らの声に耳を傾けるべきとし、中国人による日本人批判が長々と引用される。そこには確実に1910年代に全発が示した植民地への視線が息づいている。しかし他方では、彼の文章から「琉球民族」という言葉が消え、「我々日本人」「大和民族」という語句が前面におどりだすようになる。

三つ目の章「戦時体制と沖縄方言論争」では、1935年の沖縄県立図書館長の就任から、方言論争、戦時下の和歌、沖縄戦までが対象となる。従来、方言論争において柳宗悦ら民芸協会に同調したことにより図書館長職を罷免されたことが知られていたが、全発の発言内容自体は明らかでなかった。史料からうかがえる全発の認識は、県当局の逆鱗に触れるものとはいえず、標準語励行を大前提としつつも方言撲滅には反対するというものであり、志喜屋孝信中学校長ら沖縄人知識人と同様なものであった。逆に、沖縄の言葉に関しては、「訛誤の多い今日の琉球方言には私などもあまり執着はない」(149頁)「よくも琉歌などを詠んで楽しめるものだとあきれれる位である」(150頁)という表現まである。さらに全発は、日本精神を感得するためには琉球の古謡おもしろさうしを研究する必要があるとさえ言う。これらの全発の発言は、当時の沖縄認識の支配的な認識枠組みであった柳田国男の「古日本の鏡としての琉球」と符合するものであった。また、方言論争前後に歌人でもある全発の、小声ながらも戦争遂行を詠む和歌や、朝鮮人への差別的な認識とも解釈しうる和歌が紹介される。そうして、対馬丸遭難でわが子を失い、沖縄戦においては、英語が話せるということのみで少年護郷隊員にスパイ容疑をかけられ処刑されかけた体験が紹介される。

四つ目の章「戦後を生きる全発」では、1953年の死去までが対象となり、沖縄民政府官房長時代の東恩納寛惇との論争が中心的に描かれる。近世琉球期の摂政向象賢に関わる論争は、単なる歴史評価ではなく、向象賢から、その日琉同祖論という認識を継承すべきか、戦略家としての態度を学ぶかというもので、沖縄の帰属問題へ向きあう沖縄現地の知識人と本土在住沖縄知識人との対立という色彩を帯びていた。

最後の「沖縄近現代史とは何か―エピローグ」では、沖縄近現代史の特質が論じられる。著者は、帝国臣民でありながら被抑圧的な存在でもあった沖縄人の「二重意識」に、その特徴を確認する。それは「植民地近代」の有する「解放」と「抑圧」の反映であり、さらに「国家・国民」と「民族」への帰属の「二重意識」であり、ナショナリズムとパトリオティズムの「二重意識」でもある。それを分かち重要な要素を「歴史認識」であるとする。

2. 本書の意義

以上のように要約しえる本書が有する意義を四点指摘したい。まず、著名だがその思想・生涯が明らかでなかった全発の全体像を、地道な資料収集の成果により浮き彫りにした点である。全発の数冊の著作と比屋根照夫の先駆的な研究からは窺えない、人間全発の個性が活写され、その人生と思想、思想の変容過程が解明されている。全発の「琉球民族」認識、方言論争での発言、沖縄戦下のスパイ嫌疑、戦後の東恩納寛惇との論争など、新たな事実と評価とが提示されている。基礎的史料の収集が立ち遅れている沖縄史研究において貴重な作業といえよう。また、思想や感情

が表出する史料として、和歌を多用する手法は、少ない史料を補うという意味だけではなく、史料の持つ喚起力を活用しようとする著者の姿勢の表れであり、精神の嬖や情念的な世界を描こうとする思想史研究として有効に機能していると思う。ないものねだりではあるが、著者が確認した百三十点余りの全発の著作一覧が巻末にでも添付されていれば、さらに研究状況の進展となつたであろう。

二点目に、全発の「琉球民族」意識の様態とその可能性を開示しえた点である。伊波普猷の提示した沖縄像（日琉同祖論と個性論）とは異なる全発の「琉球民族」意識が、どのような要因で形成され、先行世代である太田朝敷や伊波らとどう異なっているのか明らかにされている。全発も、先行世代が有したアイヌ民族や植民地の人々への差別の視線から免れなかったが、帝国日本の重層的差別構造から逃れえるわずかながらの可能性を示したことは、沖縄近代思想史上に新たな探求課題を提示しえたといえよう。

三点目に、全発の思想と生涯を描くことで、沖縄の近代を捉える議論に新たな論点を付与した点である。沖縄の近代を「植民地近代」ととらえ、その特徴としての「二重意識」を指摘し、その意識を形作る要因として「歴史認識」「主観的方面」の重要性を指摘している点である。周知の通り、沖縄近代史研究では、1970年代に旧慣温存期の歴史的な評価をめぐりその植民地的性格の有無が論じられてきた。近年では、思想史の分野でも植民地性が論じられている。そこに「歴史認識」の重要性を指摘している点が議論を一步進める契機となっている。歴史を学び直すという態度は、著者が『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす 記憶をいかに継承するか』（世織書房、2009）で提起したものだが、その姿勢は本書でも貫かれ、研究対象である全発自身が沖縄の歴史をいかに学び直し、彼の生きたそれぞれの時代と向き合ったかが跡付けられている。その歴史認識が沖縄のパトリオティズムの要因としているのである。沖縄と大和との制度的な次元での同一化が進展する1888年から1915年までを扱った最初の章のサブタイトルを、あえて「文明開化から植民地時代へ」としているところに、沖縄の近代への著者の視点が表現されている。もちろん、より緻密な説明が求められるが、問題提起として大きな意義を持ちえている。

四点目に、総力戦体制期・占領下を生きた知識人の言説をいかに読み解くのかという論点を深めた点である。大政翼賛会に参加した知識人である全発だが、彼の短歌が解釈され、その「声のあげ方」が同時代の知識人との比較において検討され、「彼の自制した声」（169頁）が聞き取られている。戦時下の沖縄知識人の戦争への加担の問題は伊佐眞一（『伊波普猷批判序説』影書房、2007）が提起したものであり、沖縄史研究者に大きな衝撃を与えたが、体制への加担とそとのぎりぎりの態度を丹念に描こうとする著者の姿勢は、伊佐への応答のように評者には思われる。また、占領下に関して、知事公選論に距離を置く全発の認識は、復帰運動を当為とする歴史観ではその反動性が指摘されるであろうが、著者の叙述は、改めて米軍占領下という状況を生きる知識人の評価のあり方を問うものといえる。

3. 本書の課題

最後に本書の課題を三点、指摘したい。まず、全発の「琉球民族」意識の変容についてである。1910年代の「琉球民族」意識が総力戦体制下で「古日本の鏡としての琉球」という柳田民俗学の枠組みに飲み込まれてゆく過程として本書では描かれているのだが、柳田の枠組みを受容してゆく過程に全発なりの抵抗といったものがなかったであろうか。著書の別の研究（「古日本の鏡としての琉球」『南島文化』第21号、1999）では、柳田の枠組みに必ずしも収まりきれない沖縄在住研究者が描かれている。その視点が本書では継承されず、戦前期に関しては、柳田の枠組みへの従

属化の過程という印象を与えてしまっており残念に思う。それというのも、1930年代においても、全発の「琉球民族」意識と同一ではないにしろ、強烈な「沖縄人」意識を高唱する沖縄知識人が少なからず存在した。例えば、郷土教育運動のさなかの沖縄県立第三中学校教諭豊川善曄などである（城間有「豊川善曄論——「個」の行方——（抄）」『琉球アジア社会文化研究』第3号、2000、参照）。全発はなぜ「琉球民族」意識を保持しえなかったのであろうか。「主観的側面」を重視するがゆえであらうか、個人的な資質のゆえであらうか、何らかの説明がほしい。さらに全発の「琉球民族」意識が、戦後においてどのようになったのか、東恩納との議論などの中にその行方を確認することはできないのであろうか。

二点目に、和歌の解釈についてである。1938年の「那覇港の軍馬」のなかのひとつである「皇国の領に生まれて けものらも 大み軍に 従い征くも」の「けものら」を朝鮮半島から強制連行された軍夫たちであるとの仮説的な解釈を提示し、もしそうであれば、植民地の人々への暖かい眼差しが消えうせたことになるとしている。しかし、全発の植民地への視線の変容という本書の大きな筋に関わる点であるだけに、仮説的であれ、そのような解釈をくだすには、歴史研究としては傍証的な史料や事実の提示が求められよう。

ただし、あえてこのような強引な解釈を提示した著者の思いも考察の対象となろう。この和歌は、初出（「人物列伝 島袋全発」『沖縄タイムス』1994.11.21-1995.2.7）では引用されていないものである。また前述の「満鮮旅行による教訓」（1924）への解釈でも、全発の表現に「鮮人」という差別的な表現が散見するとの指摘も新たに付け加わっている。被抑圧者である琉球人としての意識が植民地の人々と繋がる新たな可能性をもつという基本的な思いは一貫するが、1994年の初出と2010年の本書刊行の間に行われた、歴史認識論争や東アジアにおける歴史対話の具体的な進展とその困難さが、著者の評価をより慎重なものにしたのではないかと想像する。

三点目に、全発の戦争への関与とその後の生き方に関してである。著者は、「全発の戦後の生活は、戦前の否定されるべき沖縄近代史の歴史的結末である沖縄戦の惨劇を反省しながら、それを教訓として新たな日々を生き直す軌跡であった」（202頁）と評価する。前述のように、総力戦体制期の知識人の発言を慎重に叙述する著者の態度からは多くを学ぶべきである。しかし、そのように評価するには、小声ながらも戦争遂行の声をあげていた全発が、その経験をどのように反省し戦後の生き方に表現していたのかを、より具体的に示す必要がある。全発の戦後の活動に関しては、遺族援護への尽力、文化財保護活動、東恩納寛惇との論争が叙述されているが、それだけで上述の評価は下せないであろう。知識人や教員の戦争責任を問うという行為が、近現代沖縄史研究において、どのような意味合いにおいて必要なのかも含めて、今後とも考察されなければならないと思われる。

とはいえ、全発という個性を蘇らせ、多くの論点を提起した本書の意義は大きなものである。今後、それらの論点に対する活発な議論が待たれる。それは読者の側の課題である。

（天理大学非常勤講師）